九五歳の中小企業診断士が亡き妻たちに献げる

生き残れる企業になるために

植村　尚

はじめに

世の中何が卑しいと言っても、世のため人のためと言いつつ自分の欲をかくくらい卑しいことはあるまい。

（臨済宗妙心寺派管長・故・山田無文老師）

私は令和三年一二月一四日に九六歳になります。お陰様で心身共に健康に恵まれて幸せな毎日を送っています。

令和三年四月五日に糟糠の妻・満利子が誤嚥性肺炎のため逝きました。（享年九一歳）

私は二人の妻・泰子・満利子に先立たれました。

中小企業診断士として今日病気で倒れれば家族は明日から路頭に迷うという経営顧問業を六三年間貫くことができました。すべて糟糠の妻たちがどんな時にも黙って支え続けてくれたお陰です。

私は無一文どころかマイナス一五〇万円が創業資金です。

あなたが本当にやりたいのであれば、そしてそのことが世のため人のためになり、役立つのであれば、創業資金は必ず調達できます。勿論予想していた以上の苦労が次々と襲いかかります。

でも高齢者と言われる私がたどってきた足取りが若い人、また資金さえあれば自主独立したい

人たちの参考にまた助けになるならば、と敢えて新著書刊行を決意しました。

この本では幾つかの実例を紹介します。約五〇年間は住宅業界、それも中小工務店との関わりが大半でした。多くの大企業とのお付き合いも私が工務店の建築現場を知っているからこそ。大企業が進出した住宅産業界での販売網つくりや販売先企業育成が可能だったからです。

紹介する実在企業の事例はあらゆる業種の企業にも必ず参考にして頂ける企業経営の根本事項と信じるからです。どうかご了解をお願いします。

今や第五次第産業革命の時代と言われています。

◆ウイキペディィァ・産業革命より

産業革命とは、一八世紀半ばから一九世紀にかけて起った一連の産業の改革と石炭利用によるエネルギー革命、それにともなう社会構造の変革のことです。綿織物のさまざまな技術革新、製鉄業の成長、蒸気機関の開発による動力源の刷新等です。また、蒸気機関の交通機関への応用によって蒸気船や鉄道が発明されたことによる交通革命もありました。

国内総生産も増加あり、産業革命は市民革命とも言われます。

イギリス産業革命がほぼ終了する一八三〇年代に入ると、イギリス以外の国々（富国強兵を推進した欧米国家および幕末から明治初期の日本）にも産業革命が伝搬するようになりました。

その後にも何回もの産業革命があり、自動車工業に作業用ロボットが導入された時から第四次産業革命では、いわゆるオートメーションによってロボットが出現、アイフォーンが人間に変わってＡＩに。量子コンピュータは今のコンピュータで千年かかる計算の答を数分で出すことが出来ます。

第五次産業革命は「人間の人間による人間のための産業」を創造する革命です。想像を絶するスピードで進展するインターネット、ＩＴ、ロボットによる技術的進歩と人間との調和を確立するための革命です。経済産業省では【最新のバイオテクノロジーの融合により、健康、医療から、工業、エネルギー、農業にまで起きる大きなパラダイムシユフト、報告書では「スマートセルインダストリー」と表現し、最先端の情報処理技術とバイオ技術の活用により機能がデザイン・作成された賢い生物細胞であるスマートセルが創出する新たな産業群】と定義しています。

この革命を乗り越えられない企業は急速に淘汰されて消えて行きます。

九六歳を迎える私はすべての企業、人間はこの時代にあることを訴えます。

約八〇年前の大戦前後、そして戦後混乱期の実情等も書きます。団塊の世代以下の若い人たちは学校でも教えられていないようですから。

目次

はじめに …… 1
第一部　幼少期から …… 9
1–1　幼少期から中学校時代 …… 11
第二部　支えてくれた妻たち …… 19
2–1　泰子（旧姓・貴船） …… 21
2–2　満利子（旧姓三宅・柴田） …… 32
植村尚のプロフィール …… 44
第三部　我が青春に悔い無し …… 47
3–1【在外父兄救出学生同盟】活動 …… 48
3–2　京都『在外父兄救出学生同盟』誕生 …… 62
3–3　北朝鮮・在留邦人と金日成 …… 68
3–4　いつの日か花咲かん …… 81

第四部　中小企業診断士として……83
4–1　国家資格・中小企業診断士登録……84
4–2　中小企業診断士として……91
4–3　家電業界とご縁が……95
第五部　住宅産業との関わり始まる……97
5–1　住宅産業の友として……106
5–2　プレハブ住宅にも……112
第六部　二人の妻に支えられて私は生き抜いた……117
6–1　生き残れる企業たち……118
6–2　顧客第一…お客様第一主義……152
おわりに……189

第一部　幼少期から

私は二度妻に先立たれました。でも二人とも最後まで支えきれたという自己満足感があります。妻たちに献げる気持でこの部は書かせて頂きます。

私にはあれをしておけば良かった、しなければ良かった、と言う悔いや思いは不遜ながらありません。精一杯生き抜いてきた、と子供や孫たちに言い残せます。

幼いときにはカラダが弱く、三〇歳までは生きられないよ、と複数の医師から宣告を受けていました。事実、四〇歳までに大抵の病気や手術も受けました。

また一六歳と二六歳の時に肺浸潤を患って各一年間絶対安静の療養生活を送り、生涯忘れられない幾つかの体験もしました。

中学生（京都府立二中・現・鳥羽高校・五年制）の二回目の三年生時には教練（戦時中でしたので軍事教練は必須科目でした）、さらに体育、武道（剣道でした）もすべて見学で、配属将校（戦時中には中学校以上の学校には配属将校という現役将校が派遣されていました）から「貴様は国賊だ」と罵倒されたときの悔しさは生涯忘れません。